

さざなみ

国語教室

さざなみ国語教室
 第515号 2025年 2月25日
 発行者代表 吉永幸司
 連絡先 大津市柳川2-11-5
 TEL 077-522-1008
 発行所 滋賀児童文化協会
 NPO 現代の教育問題研究所

国柄と日本人 佐藤 久忠

真夏の太陽が、ぎらぎらと照りつけて、昭和二十年八月十五日は、誠に暑い一日だった。此の日は、天皇陛下の玉音放送と、鎮守様のお祭が重なって出店などはなかったものの、祭り文は昔ながらの伝統で例年の様に行われて居た。集まった人達は、噂が噂を呼んで、進駐軍が来ると皆殺しになる等てんやわんやの大騒ぎ、泣いて居る人も居た。それでもお祭りが始まると、涙は飲んで心静かに「その時はその時やな」とばかり、難しい決断も切り換えて、少しずつ落ちついて来た様だった。翌日早朝は田圃の一仕事を終えて、帰る影や「お早うさん」と明るさを取り戻して居た。昭和二十年八月十五

日の勅令が発せられて居なかつたら、日本と言う国は滅びて居たのかもしれない。太平洋戦争の事を十五年戦争と呼ぶ人も居て、それが日清日露戦争まで数えると大変長い年月を関わった事になるが、戦争はその勝敗に関わらず膨大な命共に財政的費用も膨大になり、世界経済に及ぼす影響の大きい事は、現代の人なら誰でも知っている事実である。何百萬と言う命の犠牲、住む家までも「無謀の一言」戦争は絶対あつてはならないのだ。私の兄もニューギニアに於いて戦死した。二十二歳の命だった。その昔「白村江の戦い」という戦いがあった。百済といふ国が唐

と新羅の連合軍と戦い、滅び行く寸前、日本に救助を求めて来た。義勇を感じた日本は二萬とも、三萬とも言われる援軍を送ったが、ほとんど全滅に近い大敗北を決した。唐と新羅の連合軍は荷担した日本を攻めようとしたが、先方唐側の事情で、日本を攻略出来なかつた。もしも攻め込まれて居たら、恐らく日本は滅んで居たらう(学者の見解)と聞いて居る。大陸の文化水準の高さ、常識的教養の高さから、勝てる筈はないと見た日本は、急遽国防備は勿論の事、国家の土台をなす国民の知力向上を目指したのであろう。勸学堂を創建し、国民に学問の進めをした日本で初めての教育制度で、現在も勸学町なる地名が残されて居る。又白村江の戦い後難民となつた百済の住人を日本に迎え、高い文化を取り入れるなど、日本の土台作りに励んだ時代であつたとも言えるのであるが、残念乍ら運勢の悪戯、歴史の大損失「壬申の乱」により志賀の都は焼失するのである。畏れながら、御製御歌啓上を以て、稿文の責と致します。

上皇陛下御製
 日の本の国の基を築かれし
 すめらみことの古思ふ

上皇后陛下御歌
 学ぶみち都に鄙に開かれし
 帝にましぬ深くしのばゆ

(近江神宮三代目宮司
 近江神宮顧問)

さざなみ

▼「問い」を持つこととは、よりよい生き方にとどり着くための重要なステップである。国語教科書においても「問いをもとう」という導きがある。「問い」は、問題を見つけ、考え、解決の方向へ視点を定めることとなるからである▼4年生の子が新聞で「幸福度の世界ランキング」の記事を読み、「幸福度はどうして決めるのだろう」という疑問をもった。順位を決めるには、運動会の玉入れやテストの点数のように数値化することが必要だとも考えた。また、幸福の意味を辞典で調べると、幸福の意味は「心から幸福を感じる状態」である。この時の子のその時の問いは、「どんな時に幸福かと思うのか」であり、自分に問いかけても答えは見つからないう状態。そこで、家族の協力を得て「今日一日、幸福でしたか、不幸でしたか。その理由」というアンケートを継続してとるという方法を実施。アンケート期間中に家族の誕生日があり、幸福の記述内容が「家族であったも違うこと」に気づく。このような思考過程を自由作文にまとめた。文章を書く過程で、身近な出来事に対する気持ちから世界の平和へ考えが広がっていることは広がる。▼「幸福ランキング」のひとつの記事から疑問が生まれ、その疑問を解決するために情報を集める。見る、聞く、考える、書くという多面的な言語活動へ発展したという。そして、この子の背景には小学生新聞を毎日読むという日常がある。「問い」は「問い」を生み人を大きく育てる力がある。(吉永幸司)

Canvaを活用した問い作り
高木 富也

これまでの機関誌では、「すいせん」のラップ」「はりねずみと金貨」(共に東京書籍三年上)における問い作りの実践を報告した。教材と単元のゴール(言語活動)を繋ぐのが【問い】であること、深い教材研究を土台に【問い】を通じて主体的に学ぶ場を創っていくことの重要性を報告した。今回は、「注文の多い料理店」(東京書籍五年)における、Canvaを活用した問い作りの実践を報告する。今回の問い作りは、Canvaのマジック作文(AI要約機能)をどのように問い作りに活かすことができるか、という挑戦であった。漠然とAIと聞くと、不安や拒否感もあるのではないだろうか?特に、読みの根拠を叙述から探す、一人一人の読みや学級の読みを大切にしていくなるとは、相性が悪いような感覚もあった。

そこで児童と共有したのは、「AIを鵜呑みにしない」という合言葉である。児童も、現代社会の様子や感覚として、AIの言う通りではないということも理解していた。AIが導いた問いをベイスに、問いの分析・検討・修正を行い、本学級の問いへと再構築する活動を取り入れた。

問い作りの手順を述べていく。初発の感想後、児童が考えた問い

をCanva(ホワイトボード機能)に付箋機能を使って打ち込んでいく。問いの視点(Aなぜ? B変化 C言葉の意味 D必要性 E印象的 F自分だったら Gそれ以外)ごとに付箋の色を分けて投稿し、分類する。そして児童全ての付箋を対象に選択し、マジック作文(AI要約機能)を用いて、【5年星組の問い】を設定する、といった流れだ。

最終的に、児童の付箋からAIが導いた問いは次のようなものがある。「犬が死んだのに、生き返って、戦ったのはなぜか?」「山猫軒はなぜ消えたのか?」「おなかにお入りください」などの言葉の意味?」「くしゃくしゃの顔が戻らなかったのはなぜか?」

どうだろうか?教材研究を基に教師が立てる問いと遜色なく、児童に気づかせたい作品の特徴も明らかに入り込んでいるのではないだろうか?これらの問いがAIの力によって、児童の目の前で、たった5秒でできあがるのである。正に、児童が自分たちで立てた、解決したい問いだと感じるであろう。

今回の実践から、【問い作り×AI】の可能性を感じた。先人たちが積み上げてきた研究や実践を大切にしながら、必要な場面を見極めてテクノロジーを導入し、新たな価値を創出する。そんな感覚をもって今後も授業開発に励みたい。

(東近江市立能登川南小学校)

ことばのあそび
弓削 裕之

「ものの名まえ」(光村一年下)の学習で、「おみせやさんごっこ」をすることを目指して学習をした。「一つ一つの名まえ(りんご、みかん、ぶどう)」と「まとめてつけた名まえ(くだもの)」を区別することに焦点を当てた教材だ。花、楽器、文房具・・・いろいろな「名まえ」を発表している時から、子どもたちのワクワクが見えた。「おみせやさんごっこ」とつながったのだらう。教材に魅力があると、たった一つの問題で子どもたちの発言が絶えない授業になる。ノートはみるみる埋まっていた。

相学級の先生のアイデアで、おみせやさんごっこ前に「おみせやさんのことば」と「おきやくさんのことば」の学習をした。「こんにちは」「いらっしやいませ」「おすすめはありますか」「りんごはいかがですか」「りんごを一つください」「ごっこ」「ありがとうごさいます」。この学習のおかげで、おみせやさんごっこがただの遊びではなく、「ことばのあそび」になった。おみせやさんごっこは休み時間の遊びの一つに仲間入りし、それを機に友だちの輪が広がった。

「ことばあそびをつくらう」(光村一年下)も、子どもたちが大好きな教材だ。「かばんの中には(かば)がいる。」と読むと、「だじやれです」と誰かが言った。

子どもたちの文化の中に近いものがあると、自然と教材に飛び込むことができる。「いわしの中には、() が入る。」

「わしです。」
「まだあります。いわです。」
そのまま流れそうになるが、やはりストップをかける子がいる。「いわだったら、さいごが(ある)になります。」

大切な言葉の学びに焦点が当たる。教材が練られていると、教師のおしやべりはほとんど必要なくなる。文作りの活動では、大切な部分だけを穴あけにした短冊を用意した。

- ・(れいぞうこ)の中には、(ぞう)が(いる)。
- ・(のみもの)の中には、(のみ)が(いる)。
- ・(じめん)の中には、(めん)が(ある)。
- ・(かいすいよく)の中には、(いす)が(ある)。

言葉遊びに興味がある様子だったので、「ことばのへんしん」(「さい」に一字増やしたら「やさい」など)に挑戦。「たい」につけられる言葉が多いことを発見し、「へんしん名人!」と盛り上がった。今度は二字増やしてみる。「たいいく」「たいやき」「こうたい」・・・言葉が尽きると、「上と下に一字ずつつけてもいいですか」と新しいアイデアが。やはり、子どもは遊びの天才である。

(京都女子大学附属小学校)

「わからない」という
わかり方
少徳 信

「先生、ちょっと思ったんやけどさ」

「ありの行列の学習が進む中で、A君が言い出した。」

「ありがおしりから特別な液を出して、それを他のありがたどるから行列ができるってのはわかったんやけど、その液はいつ出してるん？」

A君の素朴な疑問に、「え、帰りじゃないん？」「いや、行きも出してるかもしれへん」といった声飛び交う。学級に尋ねてみると、行きだけ出していると考ええる児童が0人、帰りだけ出していると考ええる児童が14人、行きと帰りを出していると考ええる児童が12人だった。

この結果を受けて、子どもたちは「ありはいつ特別な液を出しているのか」という問いに向かうことになった。帰りだけ派は「はたらしきありは、えさを見つけると、道しるべとして、地面にこのえさをつけながら帰るのです。」に行きのことは書いていない点や「えさを持って帰るときに、同じように、えさを地面につけながら歩くのです。」がえさを持って帰るとき「も」になっっていない点を根拠にした。一方、行きも帰りも派は、行きに液を出しているかどうかについて明確に書かれていない点、そもそも液などの目印がなければどのように巣まで帰れるのかとい

う点を根拠に議論を展開した。

その時間の最後、子どもたちが出した結論は「帰りに液を出しているかどうかは現実だが、行きに出しているかどうかは現段階ではわからない」というものだった。この結論が出た当初、明確な結論が出せないことにもややもやした気分を覚えるのかと思ったが、子どもたちからは「考えるのが面白い」「もっと色んな方法で調べて解決したい」という声が多く聞かれた。中でも、ある児童は「わからんことが出てくると、なんかわくわくするようになった」と話してくれた。これらのことから、子どもたちはわかることの気持ちよさと同じように、未知のものについて思考することそのものの気持ちよさを感じていたのだろうと考えた。

「わからない」という感情は、わかることがあるから生まれるものである。今回でいうと、本文の内容がわかったからこそ本文に書かれていないことに気づき、それが問いとなって学級全体に波及した。さらにこのままではわからないという結論を導いたことで、図鑑やインターネットで更なる情報を得ようという姿が見られた。ここで、「わからない」ことを否定してしまったり（わかるまで読みなさいとしていたら）、子どもたちは無理やり納得解を出そうとして考えることの楽しさは失われてしまっただろう。「わからない」に気づくことが探究的な学びの入り口になるのだろうと感じた時間だった。

(彦根市立高宮小学校)

はじめての俳句
〜一年生の俳句教室〜
好光 幹雄

俳句は伝統文化の一環として、三年生から国語科教科書に掲載され、更に高学年になり俳句を詠む創作活動がなされている。もちろん、これでも支障はないが、我が国の伝統文化の継承と発展という点では、もっと幼い頃から、この俳句に慣れ親しみまた創作としての国語科の指導があつて然るべきと考える。

芭蕉は「三尺の子に俳句を詠ませよ。」と、弟子との問答集の中で述べている。つまり、幼い頃より純粋な穢れのない心で俳句を詠むことを強調したのである。一年生の教科書には詩(ポエム)は何篇も登場している。俳句も詩の形式であり、日本固有の誇るべきポエムである。低学年から俳句を指導することは、むしろ子ども豊かな感性と詩心を育み自己表現の場を広げる意味で有意義であると考える。

- 1. 単元と本時の目標 俳句の定型に親しみ俳句を詠む。
 - 2. 評価規準 五・七・五のリズムに慣れたか。俳句が詠めたか。
 - 3. 本時の展開
- ① 児童の生活の中から季節の風物詩に関心を寄せ、季語の導入とする。
- 例・節分、雪、水仙など季節らしいもの
- ② 俳句を知ろう。
上五・中七・下五の定型
俳句は言葉の写真

③ 俳句を詠む。上五と下五は教師側から与える。

あおいそら
○○○○○○○
わらわら
たんぼぼを例
にクラスでモデルを作る。

あおいそら
たんぼぼさん
たんぼぼさん
わらわら
たんぼぼさん
たんぼぼさん

☆たんぼぼさん《が・と・も》
の一言の違いでイメージが変わることを確認する。

☆上五と下五を入れ替えても良いことを伝える。

あおいそら たんぼぼさんと わらわら
わらわら たんぼぼさんと あおいそら
☆下五「わらわら」を変えてみる。
例 おどつてる うたつてる 等
一年生児童のはじめての俳句作品
あおいそら にじがかかるよ わらわら
あおいそら インコくんが うたつてる
あおいそら たんぼぼさんが くものる
ひろいそら みんなえがおに かえつてる
あかいそら からすちゃんに わらわら
あおいそら にじがピカピカ わらわら
にじのそら なないろきれい わらわら
ひろやすみ みんなとあそぶ 一年生
あめのそら ぬれたはっぱが おどつてる
あおいそら シクラメンさん わらわら
あおいそら くもくんたちが みつめてる
あおいそら いつもここに 一年生

教室に子ども自己表現の喜びの笑顔の花が咲いた一時間であった。

チユリーッ さくころみんな 二年生
(大津市立膳所小学校 幹雄)
近江の子ども俳句教室実行委員長)

自治会長に求められる

国語力・人間力

伊庭 郁夫

教育現場を離れて六年。生まれ育った地元約二百世帯の自治会長を仰せつかった。社会福祉の仕事等をしながら二年間、副区長・区長として尽力しようと決意した。

『聞く』
「区長さん、カーブミラーをつけてほしい。事故が起こってからは遅いので」

「区長さん、ごみの不法投棄があつて困っています。対応してください」

「区長さん、コロナがおさまってきたので、今年の夏祭りどうしますか」

「区長さん、祭の担い手の若者がいなくなつてきている。このままではお祭りが続かない。どうしましょう」

「区長さん、田んぼをする農家が減っている。このままでは、荒れてしまう。補助金の問題もあり、うまく継続するにはどうしますか」

次々と、あちこちから直球や変化球が飛んでくる。その球をいかに素早く投げ返すかが区の自治会長の役割。

地区内を歩き直接困りごとや要望をお聞きして対応する。

副区長・評議員・宮総代・事務員・民生委員・歴代の区長経験者・市役所職員等に協力頂き対応にはスピードを重視した。

『話す』

区民総会では、活動報告はパワーポイントを使って視覚的にもわかりやすく区民にお伝えした。口述書を用意しスムーズな議事進行に留意する。

お祭りの継続については何回も歴代宮総代と話し合い二度の臨時総会を開催し、多くの貴重なご意見を頂いた。お陰で何とか今後の祭礼の具体的な見通しが描けた。

また、圃場整備の継続課題では、改良組合や土地改良の担当者と直接お会いして改善点を繰り返し話し合った。特に予算面での折衝に時間を費やした。

毎回の評議員会では、夏祭りの開催や川掃除の分担、敬老のプレゼント配布等細部に至るまで話し合い確認作業を進める。

ゴミの不法投棄に関しては、お困りのお宅を訪問し、市役所の環境対策担当者と話し合いを持った。地区でも看板の設置やダイヤル式の鍵を購入するなど納得していただけるよう心掛けた。

『読む』

市役所からは、区長会の案内・街づくりの計画・河川の清掃・緊急時の要支援者の避難訓練の実施等多くの案内が届く。

基本的には、実施計画・各活動の実施・写真を添えての実施報告

・会計処理が必要になる。初めて聞く内容もあり実施要項を繰り返し読む。不明な点は調べたり聞いたりする。

特に、田んぼの件や税金も含めて予算・決算に関することは説明を求めることが多かった。

自治会館には、多くの文書ファイルがある。必要な書類を探し出す。特に個人情報に関する表記には配慮を要する。

次年度の自治会長には資料が探しやすいように月ごとに整理して引き継ぐ。

『書く』

広報誌には挨拶文や区の考えを書く。毎月お知らせを出し、区の行事予定等を書く。そして、回覧版や掲示板でお知らせすることにした。これは好評で、区民への情報提供の周知に努める。特に配慮を要するのは計報である。通夜や告別式の案内は、グレイの用紙で回覧する。家族葬や香典の有無など正確な情報のやり取りをして配布する。

市へ提出する実績報告や会議の要項、要望書等文書は重要である。

国語力・人間力が試されていたと感じる。各担当者とのコミュニケーションや信頼関係が根幹である。うまく進んだのは周りのおかげ、つまずくのは自分の責任との覚悟の二年間であった。

(セントラルサービス)

編集後記

▼一月例会(第一五一四回)の提案は山田定

子さん(北野小学校)好光幹雄さん(膳所小学校)山田さんの研究主題は「選んだ民話を紹介しよう」・研究教材「三年とうげ」(光村図書・3年)。提案内容は読書紹介に導く教材の生かしかつながらる出来事の理解と文章の見つけ出すことを大事にした実践報告であった▼山田さんは、教材文を大事にして基礎となる言語力を育てたいという強い信念がある。具体的に「全文を丁寧に読むことを目的とした自作のワークシート。そこには、表現の細部(句読点・漢字・主語と述語・語句の使い方等)を見逃さないようにという配慮がある。勿論、授業のまとめの段階では、自己肯定感につながる「振り返り」を書かせている。更に、単元末には、ワークシート・振り返り・全員の文章を掲載した紹介文(プリント)等、これらを綴じ合わせて「学習ノート」が出来上がる。どの子にも学習記録が手元に残るといふ提案▼好光さんは「比べ読み(提案)」と「季節に親しむ(話題提供)」の二つ。「比べ読み」では、自作の「国語通信(花明り)」をもとにし「なぜ、教材は「じどう車くらべ」(1年)及び「ごんぎつね」と「手ぶくろを買った」(新美南吉)について。提案内容は、それぞれの自動車の「しごととつくり」を比べることや育つ力や活動内容も含めた幅広いものであった。▼藤久忠さんから玉稿を頂きました。深謝。

(吉永幸司)